

氏名	西岡 瞳
ヨミガナ	ニシカ ヒトミ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第241号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 黛敏郎の器楽作品における音響的表現－《涅槃交響曲》におけるカンパノロジー・エフェクトを中心に－

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	西岡 龍彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	亀川 徹
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	丸井 淳史
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	塚原 康子

（論文内容の要旨）

本論文は、作曲家、黛敏郎が自らの器楽作品において用いた彼独自の音響的表現技法である「カンパノロジー・エフェクト」を研究したものである。

東京芸術大学を卒業後に1952年にパリに留学した黛は、滞在中に見聞を広めるとともに当時最先端の音楽に触れて、パリの音楽院ではこれ以上学ぶことなしと早々に1年足らずで留学を切り上げて帰国した。帰国後の黛は、西欧から最先端の音楽を持ち帰ったとして楽壇の寵児となり、その類稀な才を如何なく発揮して、最先端の作曲書法を取り入れた作品を意欲的に発表した。しかし、その一方で彼の中には常に、既存の作曲書法、作曲ジャンルに捉われた作品ではなく、独自の表現手法を模索する気持ちがあった。そうした欲求を強く衝き動かすことになる存在が、日本の梵鐘であった。彼は、日本の梵鐘の響きに触れた時、どんなすばらしい音楽も色褪せた無価値なものに感じてしまうくらい心惹かれたという。かくして、彼はこの日本の梵鐘の響きの正体に迫るべく、NHK技術研究所の協力を得て、梵鐘音の音響解析に取り組む。その解析結果を基に、黛は梵鐘音の響きをオーケストラで再現を試み、その手法を「カンパノロジー」と名付けた。1957年、黛はこの「カンパノロジー」による初の器楽作品、オーケストラのための《カンパノロジー》を発表する。そしてその翌年、この《カンパノロジー》を第1楽章として、全5楽章構成に発展した彼の代表作、《涅槃交響曲》の発表に至るのである。黛は、これら「カンパノロジー」を用いた作品における独自の音響効果のことを、「カンパノロジー・エフェクト」と呼んだが、この新しい音響的表現が当時の楽壇に与えたインパクトは甚大であった。指揮者の岩城宏之氏は、この《涅槃交響曲》が当時の日本の作曲界に与えた影響は今世紀の音楽史上最大だとまで言ったほどである。本論文では、この《涅槃交響曲》における「カンパノロジー・エフェクト」を主軸にしながら、黛の音響的表現の変遷やその独自性などについて考察する。

第1章では、黛が「カンパノロジー・エフェクト」に至るまで、あるいは至ったのちの音響的表現に対するスタンスの変遷を探るため、特に《涅槃交響曲》を大きな転換点と捉えて、《涅槃交響曲》以前と以降の彼の作品を、その書法の特徴とその変遷に注目しながら概観した。

第2章では、黛が「カンパノロジー」という独自の表現手法を産み出すまでの過程を追った。具体的には、彼が行ったとされる京都、奈良の寺社の梵鐘音の現地採取、ならびに音響解析を迫体験することで、「カンパノロジー」という発想までの道程を順に追って考察した。また、日本の梵鐘の独自の特徴をより明らかにするための比較対象として、西洋を代表してイタリアの教会の複数の鐘の音を、これも現地に実際に赴いて録音採取を行って、日本の梵鐘と同様のコンピュータによる詳細な音響解析にかけた。以て、黛が「カンパノロジー」を産み出す糧、そしてベースとした日本の梵鐘の響きの特徴を確認し、次章での《涅槃交響曲》における「カンパノロジー」の分析のための布石とした。

第3章では、本論文の軸である《涅槃交響曲》という黛の代表作であり、かつ彼の音響的表現における大きな転換点となった作品の中の「カンパノロジー」について、詳細にその書法、特徴などをさまざまなアプローチで考察した。梵鐘の音という1つの音響事象を、3群のオーケストラで表現するための、全パートにわたって巧みに施された精緻なオーケストレーション、そこに前章で述べた音響解析結果がどのように反映されているのかなどを、スコアの引用などを交えながら考察を行った。また、実際の演奏におけるオーケストラの配置の工夫についても、初演当時から現在に至るまで幅広く検証し、特に最近の実演での事例については、指揮者やオーケストラ関係者への独自の取材も行って、その音響効果への寄与について考察した。

第4章では、黛の電子音楽とのかかわりという観点から「カンパノロジー」について考察した。黛は、「カンパノロジー」という発想の原点について、電子音楽とのかかわりが無ければそういう発想は生まれなかったと述べている。《涅槃交響曲》以前の黛の電子音楽とのかかわりを辿る中で、「カンパノロジー」の発想の萌芽を探った。また、《涅槃交響曲》以降に彼が発表した「カンパノロジー」という言葉を作品名に冠した3つの電子音楽作品について分析を行い、黛の中で《涅槃交響曲》以降に「カンパノロジー」という音響的表現の在り方がどのように変わっていったのかを考察した。

以上、第4章までの考察をもとに、終章において、黛が作曲家としてどのような動機を以て「カンパノロジー」という独自の表現手法の創出に挑み、何を求めて《涅槃交響曲》という壮大な作品の制作に取り組んだのかを明らかにした。

以上の考察から、彼が常に音楽家としての自身のアイデンティティを模索し続けた人であり、あらゆる方向性へとその意欲的な探求を生涯続けた中で、音響表現というアプローチにおいて彼が辿り着いた最高かつ理想的なひとつの答えが《涅槃交響曲》における「カンパノロジー・エフェクト」であったということの本論文の結論とした。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、音響的表現の観点から、黛敏郎のカンパノロジーという技法が、いかに器楽作品に応用されているのかを明らかにしている。

カンパノロジーについて、申請者は黛自身が体験した梵鐘の分析を現代の音響技術によって追体験し、《涅槃交響曲》の管弦楽法がどのような思考から導き出されてきたか、緻密な分析と仮説の積み重ねから多くの成果をあげた。そのための調査は、梵鐘の分析以外に、黛と共同制作を行った音響技術者や当時の不完全な音響技術による分析を補完するために参加した演奏家、《涅槃交響曲》が再演されたときの指揮者などの多くのインタビュー、さらに、初演で使われたパート譜の書き込みの分析や《曼荼羅交響曲》との比較、電子音楽作品の分析など長期にわたって極めて綿密に行われた。当時の電子音楽は、NHKなどの放送局やホール等の設備であった音響機材を用いて音響技術者と共に制作することから、黛の音響作品を担当していた元NHKエンジニアの佐藤茂氏から多くの知見を得ることによって、黛がカンパノロジーという技法に行き着いた経緯を音響的側面から辿ることができた。研究期間を延長することで、《涅槃交響曲》の再演に申請者が立ち会えたことも貴重な体験であった。黛自身による指示が残されているパート譜の分析や、スコアに極めて簡単に図示されている分割されたオーケストラの配置を、実際にはどのようにホールの形状に合わせて最も良い音響効果を得るのかなどについて再演した指揮者から説明を受け、その実際の練習と本番の演奏を聴くことができたことは、すでに当時の関係者が少なく、資料が得られない現状では極めて有意義であった。

審査委員から、音響分析の表記の方法についての指摘があった。また、黛がカンパノロジーという技法に至った大きな要因として電子音楽との関わりがあることから、論文の全体の構成についても問題があることが指摘された。それらのいくつかの小さな問題点はあるものの、本論文は、博士の学位に相応しい優れた成果が得られていると全員の審査員から認められた。